

機械が使いにくいし故障する、行政でもっとしっかり対策をやってもらえないか？」という畜産農家のUさんに、行政がお願いして畜産農家の研修会場とし、モデル圃場を提供していただいた。

果樹や野菜と違って採草地は障害物がなく、作業自体はあっけなく終了。

具体的には、それまで採草地ギリギリまで繁茂していたイタリアンライグラスの周囲2メートルを刈払って、雑草抑制シートを張って電柵を設置すれば終わり。

研修に参加した農家からは、「面積が減る」、「柵の管理が大変」といった声もあったが、Uさんの採草地はそれで被害はなくなった。

Uさんは研修終了後も採草地周辺の雑木林や隣接する耕作放棄地も所有者と話しをつけてススキやセイタカアワダチソウ、クズなど繁茂していた雑草やササをどんどん刈払って次に行った時には採草地周辺の景色変わった。

生産空間と作業空間の分離

実は農業って生産空間と作業空間の分離から始まるんです。

例えば野菜を畝で栽培するっていうのは、畝間の通路が作業空間、畝上は野菜が繁茂する生産空間。

ほら、ミカン園だって園内道があって作業空間と生産空間が分かれてる。

アツ、ブドウやナシの棚栽培も棚下が作業空間で、棚上が生産空間。

じゃあ、採草地は？っていうと広い平原の端から端まで牧草作付けてその上を重量のある農機が走りまわってる。これって作業空間と生産空間が未分離の原始的な農業。

そこにイノシシやシカが餌付けされて住み着いただけなんです。

だって茂みから出てきたら牧草。牧草って、人類が何千年とかけて選りすぐった動物を増やすための餌でしょ。

栽培する以上はぜひ生産空間と作業空間の分離を考えてほしい。

とにかく採草地も外周路だ

けは作付けない空間確保してみませんか？

イノシシ防いだら収量増えたら、そりゃ生産量の半分、イノシシに食わせてたんだから、外周路分の作付け面積減っても収量増えるよね。

でももう一つ、収量増える原因があるんです。

外周路がないと、いつも重機が走り回って土を締め付けるから鋤床層の下に盤ができて排水不良で湿害がでて生産量おちてる採草地以外と多い。イノシシ対策で外周路作って必要な時以外は牧草踏まないというだけでも経営改善一歩前進だよ！



点検路
作業空間(播種しない)

電気柵等



周回路

イノシシやシカを住ませない採草地づくり

第2回目	9月19日(木)
第3回目	11月20日(水)
第4回目	1月23日(木)

【場所】野方地区活性化センター
【時間】午後1時30分～

【鳥獣害対策研修会の予定】



必要以外は土を踏まない
生産空間(すくすく育てる)

次回は意外と多い
野菜残渣の餌付けの
話だよ～



講師紹介
井上 雅央氏

1949年、奈良県出身。

愛媛大学大学院農学研究科修士課程修了、京都大学博士(農学)。

元 農研機構 近畿中国四国農業研究センター鳥獣害研究チーム長。

退職後、同センター専門員。宮崎県、熊本県、広島県、静岡県などでアドバイザーとして継続的に活動。

著書に、『これならできる獣害対策』『山の畑をサルから守る』『山と田畑をシカから守る』『60歳からの防除作業便利帳』『ハダニ』『女性がすれはずんずん進む獣害対策』(いずれも農文協)など多数。

